

<講演抄録>13. 若年性歯周炎の臨床像と治療及び大学生における罹患実態について(東日本学園大学歯学会第5回学術大会(昭和61年度総会))

著者名(日)	小鷲 悠典
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	6
号	1
ページ	77
発行年	1987-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007287/

- (2) 講義を独立したカリキュラムに取りこんでいる大学は皆無であった。
- (3) 講義は各科目の中で随時、行われているとの回答が22校より得られた。
- (4) 高齢者歯科学教育の今後の拡充に関しては、拡充を予定しているものが17校あった。
- (5) 臨床実習に高齢者歯科学が含まれているとの回答が9校あった。
- (6) 臨床実習の行われる場所は、ほとんどが学内であり、

学外でも行われている大学が1校あった。

これらの結果を欧米諸国の状況と対比してみると、国情あるいは文化的差異などのため正確な比較は困難ではあるが、わが国の高齢者歯科学教育はいまだ未熟な段階にあると判断された。今後の高齢化社会における歯科医学に対する要請に応えるためにも、できるだけ早急に高齢者歯科学の教育体制を整備する必要があると考えられた。

13. 若年性歯周炎の臨床像と治療及び大学生における罹患実態について

小鷲悠典（保存 I）

若年性歯周炎は10歳代前半に初発し、10歳代で第1大臼歯と前歯に特徴的な骨吸収を起こす歯周疾患として知られている。本疾患は成人にみられる歯周炎とは細菌叢や生体反応などが異なる点が報告されており、疾患の進行度は成人型に比べはるかに速い。

今回、最近治療を手がけた初診時14歳及び20歳の若年性歯周炎と思われる2例の病態像の特徴や治療経過を報告し、本疾患を治療する上で課題となる早期発見の試みとして、大学生の罹患実態調査を行ったので併せて報告する。

症例1は初診時14歳の男性で、前歯の逆被蓋と叢生、上顎左右第1大臼歯を中心に根尖付近に及ぶ骨吸収が認められた。初期治療と全顎のフラップ手術を終えて矯正治療を行った。歯列や咬合の状態が良くなるにつれ、歯肉の状態が改善された。症例2は17歳から著しい歯間離

開と上下顎の前突を自覚した初診時20歳の男性で、第1大臼歯と前歯部を中心に骨吸収がみられ、最後臼歯部を除いて、6～10mmのポケットが記録された。初期治療と外科治療により、ポケットは消失したが、前歯部の審美性に問題があり、矯正治療は行えず、現在に至っている。両症例とも初診時に、すでに根尖に達する骨吸収があり、症例1で4歯、症例2で1歯を保存できなかった。

ポケット測定を中心とした長崎大学生（主に19、20歳）の口腔検診で、被検者641名中3名の男性に、本疾患に特徴的に骨吸収と、深いポケットがみられ、0.47%の出現率であった。この値は大きいとはいえないが、若年性歯周炎の骨破壊の進行の速いことを考えれば、早期発見による早期治療が有効であるので、検診時の第1大臼歯のプロービングは考慮に値すると思われる。

14. 重度身体障害者（成人）の歯周疾患管理に関する研究

—— 口腔清掃指導について4年間の経過観察 ——

根井敏行、福士真実、川村晃弘
岩井宏之、仲川弘誓、藤川光博
松ヶ崎真秀、佐藤浩幸、坂東省一
小鷲悠典、加藤 熙*
（保存 I、北大歯保存 2*）

現在、我国では身体障害者の口腔衛生管理の重要性が強調されているが、十分な対策がとられていないのが現状である。我々の教室では7年前から精神薄弱成人に対し歯周疾患の予防や治療の合理的な方法確立を目的で研究を行っている。しかし身体障害者は精薄者とは異

なる多くの困難な問題が存在している。今回我々は、重度肢体不自由者（成人）の口腔衛生を管理し歯周組織の健康を確保する目的で、重度身体障害者の福祉施設である北海道立福祉村の入村者に対し4年間に渡り口腔清掃指導を行った。被験者は男性87名、女性55名の計142名、